

歴史の中の 女たち

第34回

レオナ・ビカリオ (1789～1842年)

—メキシコの独立に全私財を捧げた闘士—

伊藤 滋子

「愛だけが女性の行動の動機ではありません。女性も祖国のために自由と栄光を求める熱意においては男性に引けを取りません。何の見返りも求めず、欲がないだけに、かえってその熱意は男性より崇高と言えるかもしれません」メキシコの独立の英雄としてイダルゴやモレロスはつとに有名だが、レオナ・ビカリオはこう述べて、男性ばかりでなく多くの女性も独立の戦いに加わったことを示唆した。

19世紀初頭メキシコを訪れたフンボルトが新大陸で最も美しいと賞讃したバロック風の建物が彼女の生家であった。父はスペイン人の大商人、母はトルカ生まれの最上層のクリオリョ階級の人で、レオナはその一家のひとり娘として、女性の教育があまり顧みられなかった時代に最高の家庭教師が家に招かれてこれ以上は望めないほどの教育を受けて育った。だが父親は早逝し、母親も彼女が17才の時、自分の兄に娘のことを託して亡くなる。レオナの後見人であり母親の遺言執行人でもあった伯父のアグスティン・ボンボスは、王党派の法律家だが、詩を書き、本を著す知識人でもあった。彼は自分の家に隣接する別の家を借りて姪を住ませ自由を尊重してくれたおかげで、レオナはこれまで通りの生活を続けることができたが、それは当時の常識では考えられないことであった。受けた教育のお陰で、レオナは詩、哲学、宗教、文学と多岐にわたる本を読み、美術、絵画、音楽、天文学といった多彩な趣味を持つばかりでなく、養老院や孤児院、病院を訪れ、恵まれない人々を助ける奉仕活動にも熱心で



http://www.sep.gob.mx/es/sep1/10_de_abril_Natalicio_de_Leona_Vicario

あった。

母親がまだ存命中、レオナはグアナファートの名門の出であるオクタビオ・オブregonという法律家志望の青年と婚約していた。植民地時代末期のこの頃、自由主義思想、啓蒙思想、フランス革命、アメリカの独立などに刺激され、特権階級であるスペイン人から何かと差別を受けているクリオリョの間には不満が鬱積していた。そんな中、1808年スペインがナポレオンに侵攻され、国王フェルナンド七世がフランスに幽閉されたという報が伝わると、メキシコのクリオリョたちは、王が不在なのだから主権はヌエバ・エスパニャに移ったと主張したのに対し、スペイン人派はそれは独立につながる危険な考え方として、両者の対立が顕わになった。副王イトゥルガライはうまくすれば自分がメキシコ皇帝になれるかもしれないという下心もあって、両者の間を取り持とうとしたが、1808年9月スペイン人派はイトゥルガライを失脚させて、傀儡の副王をたて、クリオリョを押えこもうとした。イトゥルガライの側近だったオクタビオの父はこの騒乱の中で襲撃されて、負った傷がもとで亡くなり、彼も追われて身を隠したあと、スペインに逃れることに成功する。そして1810年、スペインにおけるナポレオンの支配に対抗して始まったカディス議会にグアナファート代表として選ばれたばかりか、ヌエバ・エスパニャ代表にまで指名された。カディス議会の議席180のうち、27議席がインディアス各地に割り当てられ、それは植民地の人々にとっては初めての本国における国政参加の機会となった。オクタビオは1812年のカディス憲法にも署名している。レオナは彼がメキシコにいた時からその自由主義的な考え方の影響を受け、彼がスペインへ渡ったあとも手紙のやり取りで、カディス議会の民主的な思想を吸収していった。しかし大

西洋を隔てた距離のせい、あるいは心変わりしたものの、まもなくオクタビオからの音信は途絶えてしまった。

話は戻って、スペイン人派が傀儡の副王をたててクリオリョたちを抑え込もうとした時、首都メキシコ市ではそれは一応成功したが、地方ではスペイン人の専横に抵抗するクリオリョの地下活動が活発化してゆく。そしてケレタロでクリオリョの陰謀が発覚し、それに加担していた人たちが捕らえられたが、その報を知らされた仲間のひとりのイダルゴ神父が1810年9月16日、ドローレス村で「独立の叫び」と呼ばれるアジ演説を行い、武装蜂起した。その隊は行く先々で先住民やメスティソの同調者を引き入れてメキシコ市を目指し、一時は10万人にも膨れ上がるが、翌年イダルゴ神父は捕えられて処刑された。イダルゴ自身は独立という明確な意識を持っていなかったとされるが、彼が始めた運動はその弟子でやはり神父だったモロスに継承され、こんどははっきりと独立を目標に掲げて戦いを繰りひろげた。

レオナの伯父で彼女の後見人のアグスティン・ボンポソはのちに大学の総長や最高裁判所の判事を務める当時もっとも高名な法律家で、イダルゴを批判する本を著わすほどの最右翼の王党派であった。彼女はその後、伯父の事務所に見習いとして入ってきたユカタン出身の弁護士のためごアンドレス・キンタナ・ローと出会い、彼の高い知性と誠実さに惹かれるようになるが、伯父は家柄の違いを理由に結婚を許さなかった。ひとつにはオクタビオとの婚約がまだ正式に破棄されていないということもあり、責任ある後見人の立場としては当然のことといえる。またキンタナ・ローがイダルゴの運動を支援しているのではないかという疑念もあった。彼の父はユカタンで最初の新聞を発刊して自由思想を擁護し、政治犯として副王政府に投獄されたという経験の持ち主である。ところが伯父は、レオナばかりか自分の息子マヌエルまでがすでに独立運動に加わっていることを知らなかった。マヌエルは後に独立の戦いの中で亡くなっている。レオナはこの時すでに、何のためらいもなく、何の見返りも期待せずにそれが正しいことだという直感を信じて、深く独立運動にかかわっていた。彼女は私財で買った衣類、薬品、武器を反逆者たちに送り、首都の政治情勢を伝えながら彼らを励ます手紙を書き、地方で戦う彼らとその家族との手紙のやり取りをとり継いでいた。手紙にはすべて彼女が割りふった偽名が用いられていたが、

その多彩な名前は彼女の幅広い文化的知識を示していた。しかしレオナが果たした反逆者たちへの最大の貢献は、副王領でも最高の腕前を持つという評判のビスカヤ（スペイン）地方出身の武器製造職人に甘い言葉をかけて味方に引き入れ、反乱軍の基地に送り出したことである。こうして現地で製造された武器は反乱軍の戦いを有利に導いた。

だがレオナは少し油断しすぎていた。自分が独立派を支持していることを隠そうとしなかったし、独立派が勝った時など大っぴらに喜んだ。不審を抱いた王軍は彼女の身辺を見張り、ついに彼女のメッセンジャーを務めていた若者を捕えて、運んでいた手紙を押収した。そんなことと知らないレオナが二人の侍女を連れてミサに出かけると、一人の女性が近づいてきてメッセンジャーの若者が逮捕されるのを見かけたと教えてくれた。レオナはそのまま家には戻らず、地方にいる反乱軍のもとに行こうとした。途中で反乱軍の部隊と出会い、同行させてくれるように頼むが、彼らはレオナのことを知らず、断られてしまう。しかし状況を知らせる手紙だけは託すことができた。何の準備もなく家を出てきたレオナは、泊まる場所にも困り、数日後には伯父に探しだされて家に連れ戻され、未亡人や孤児を取容する施設コレヒオ・デ・ベレンに閉じ込められて外部との接触を断られた。そして判事がそこに出向いてきてレオナの尋問が始まる。手紙の中に出てくる偽名はだれを指すのか、今まで受け取った手紙はどこにあるのか、誰が仲間なのかを厳しく聞き糺そうとするのだが、彼女は自分に関すること以外は頑として答えない。しかし手紙という動かし難い証拠がある以上、いかなる言い逃れも通用せず、結局反逆罪で裁判にかけられることとなった。

一方、手紙によってレオナが窮地に陥っていることを知った反乱軍は恩義ある彼女を助けようと数人の者を送り、彼らは数日間コレヒオ・デ・ベレンを見張ったあと、そこを襲って彼女を救出した。そしていったん市内に身を潜め、警戒が解かれた頃を見計らって、レオナの顔に墨を塗って黒人に変装させ、ロバでブルケ酒を運ぶ女性の中に紛れこませてキンタナ・ローのいる反乱軍の基地へ連れ出した。1813年4月のことだった。無一文で逃げてきた彼女は貧しい生活に耐え、モロスからの支援金の申し出も断った。反乱軍には資金がないのを知っていたからだ。9月、モロスがチルパンシンゴで議会を発足させて独立を宣言した時、キンタナ・ローも議会の構成員の一人であった。

正確な日付は分からないが、レオナはその年の末、彼と結婚する。しかし反乱軍の旗色はこのころから悪くなりはじめ、議会も場所を転々と移さなければならなかった。

そして翌1814年10月22日、アパチンガンで憲法が公布された。それはスペインの支配を排除して、基本的人権を尊重し、独立と市民の繁栄を旨とした国家体制を造るという、憲法と言うよりもむしろ独立国家構想案であった。反乱軍の中では歓喜と感動が沸き起こるが、丁度このころ、本国ではナポレオンから解放されたフェルナンド7世が復位し、反動的な圧政が始まった。それによって副王軍が勢いづき、反乱軍は徐々に追い詰められ飢えと死の恐怖にさらされる。それでもレオナは闘争をつづけるよう議会のメンバーを勇気づけることに努めた。だが1815年にモレロスが捕え

られ処刑されると、指導者を失った反乱軍はみる間に瓦解し、多くの闘士が戦列を離れて恩赦を求めたが、その一方で、地方に逃げて戦いを続行する者もいて、各地でそれぞれ孤立した状況でのゲリラ戦が始まった。最後まで粘り強く抵抗したのが約2,000の兵を率いてベラクルス地方の山地で戦ったグアダルベ・ビクトリアと1,000の兵力をかかえたオアハカのピセンテ・ゲレロだった。キンタナ・ロー

の率いるグループは人数が少ない分、良くまとまり、しょっちゅう居場所を変えて劇的な逃避行を続けた。そのなかでレオナは長女ヘノベバを生むが、出産場所は洞窟の中だった。1917年4月王軍からキンタナ・ローに恩赦の申し出があったが、彼は指定された場所に出頭せずそれを無視した。それ以来捜索はますます厳しくなり、赤ん坊を連れての逃避行は困難を極め、とうとう翌年3月副王軍に取り囲まれてしまう。キンタナ・ローは家族を連れて逃げることは不可能なことをみて、妻と子供を置いてひとりで逃亡した。彼は恩赦を拒否したので、捕らえられれば必ず処刑されるはずだったからだが、レオナについては伯父が恩赦を受ける手続きを取ってくれたことを知っていた。立ち去る前に彼は自身の恩赦を求める手紙を書いてレオナに託し、その手紙をみた副王はすぐさまキンタナ・ローに恩赦を与えた。唯一の条件は「スペインで恩赦を享受すること」で、要するにスペインへの追放であった。



アンドレス・キンタナ・ロー
http://www.biografiasyvidas.com/biografia/q/quintana_roo.htm

問題は、その渡航費をだれが払うかが条件には書かれていなかったことだ。

レオナが両親から相続していた8万ペソという莫大な財産は王室に没収され、不動産は不当な値段で競売に掛けられて処分されてしまっていた。法律家だったキンタナ・ローは「恩赦を与えられた罪で財産を剥奪されることはない」と財産の返還を求める。しかし官憲は「無条件で」ということは彼らの身柄に関してだけのことと主張し、「没収された財産はすでに処分されている。しかし副王の特別の計らいにより、ベラクルスの税関はそこで差し押さえられたレオナの財産8~9,000ペソをさしあたっての経費として一時的に支給するから、それを使ってスペインで恩赦を享受するように」と伝えた。副王もそれを承認し、ベラクルスの税関に対して8,000ペソの手形を組んでサインした。

ところがキンタナ・ローがその手形を両替に行くと、税関にそんな金はないので払えない、と押し返された。

この間彼ら親子3人はその日の暮らしにも困るほどの困窮状態にあり、首都に入ることは禁止されたため、レオナの母の出身地で首都から60キロのトルカで暮らしていた。キンタナ・ローは数々の案件を処理するためにメキシコ市へ行く許可を求めるが拒絶され、極

貧にあるため代理人を送ることもできない、と手紙を送って、ようやく政府の金で代理人を立てることができた。彼は副王政府に接収されたレオナの財産の状況報告を求め、同時に彼女の母の遺産の受け取りを要求した。しかし梨のつぶてで、とうとう1819年には代理人を通じて直接国王に訴えるが、副王の時と同じだった。こうして、税関は副王の手形を現金化できず、政府も金を出そうとしないので、幸か不幸かレオナと夫は出国できず、メキシコに留まったまま恩赦を享受することとなった。

1822年の独立後キンタナ・ローは、国会議員、大臣、最高裁判事などの要職を歴任し、多くの本を著し、新聞を主宰した。レオナは議会から、独立の戦いで失った財産の代償として、オコテペクの荘園とメキシコ市内にある3軒の家、現金などを供与された。生活が落ち着いてから生まれた次女には、イダルゴを記念して、独立戦争の発祥の地と同じドローレスという名を付け

た。そして生涯、新聞に記事を書いたり、詩を発表したりしながら、政治活動を続けた。冒頭の句は新聞に掲載された記事の一節である。1842年に亡くなった時は国葬に付され、現在に至るまで国葬が行われた唯一の女性である。彼女と夫のキンタナ・ローの遺骸とともに、レフォルマ通りの、金色の天使の像を頂く独立記念塔に祀られている。

(いとう しげこ)

ラテンアメリカ参考図書案内



『ラテンアメリカ 越境する美術』

岡田 裕成 筑摩書房 2014年9月 352頁 2,700円+税

征服という形で異文化が出会い、ラテンアメリカの美術が始まった。以降スペインに倣った植民都市の建設により景観が作り変えられ、初期のフランシスコ会の宣教師たちに改宗先住民画家も加わって布教のために壁画などの制作を進め、ユートピア建設の夢を描いた。植民地社会が成熟する過程で先住民の文化は否定され破壊されたが、伝統文化は変容しつつも継承され、強制されたカトリック信仰との異文化のせめぎ合いの中で存在し続けた。旧世界とクリオーリョ、先住民の造形文化という三つの要素がラテンアメリカ美術を創造し、特に副王領の置かれたメキシコとペルーを中心に成熟した。

独立によって誕生した新生国家は、美術によってその歴史と地域性を表現しようとしたが、一方で豊かな民衆美術も力強く育っていった。独立後宗主国を通すことなく直接欧州との行き来が増え、そこでの新しい動きが入ってきた第一のグローバル化は、ラテンアメリカの芸術に多大な影響を与えた。またインディヘニスモの高まりを含めアイデンティティの模索、民衆芸術の評価など、美術の世界での時代の変化はやがてグローバル化の進展とともに「アメリカの再発見」を指向する。

現地フィールドワークの成果を交え多数の図版を示しつつ、美術史の観点から大航海時代以降のラテンアメリカ近代史を論じた極めて興味深い労作。

(桜井 敏浩)